
センター通信

(第54号)

北京日本学研究中心 Tel : 68424893 (中国側事務室) : 68415630 (日本側事務室)
1996.7.5 責任編集 : 稲村哲也 吳咏梅

ニュース

- ◆6月5日◇第2回社会コース研究会 : 正岡教官が「日本の親族構造について」を発表。
◇夜、 蔵主任の案内により湖広会館で京劇を鑑賞。
- ◆6月6日◇第6回公開講座 : 竹村教官が「説話研究の現在」を発表。
- ◆6月7日◇文化コース修論中間発表
- ◆6月13日◇第7回公開講座 : 小川教官が「『水が飲みたい』について」を発表。
- ◆6月15日◇交流基金の村上氏がセンターに卒業生数名を招き懇談、 蔵主任、 徐副主任、 木山主任が同席した。
- ◆6月17日◇第11期研修コース研修生が研究報告書を提出。
- ◆6月19日◇山野先生離任◇第3回社会コース研究会 : 周教官が「中日農村工業組織について」を発表。
- ◆6月20日◇第8回公開講座 : 基金北京事務所ホールにおいて木山主任が「正岡子規と周氏兄弟」を発表。
- ◆6月22日◇センター主催による天津図書館見学一日旅行。 昼には館長と日本文庫関係者による招宴。
- ◆6月25日◇中根千枝協力委員がセンターを来訪。
- ◆6月26日◇第4回社会コース研究会 : 稲村教官が「中国の伝統的家族・親族とその変容—日本と比較」を発表
- ◆6月27日◇第11期研修コース研修生19名が徐副主任の引率で訪日のため出発。
- ◆6月28日◇篠崎先生ご夫妻離任。◇文化コース研究会 (座談会)。
- ◆7月4日◇大学院春期授業終了。◇宮村先生離任。
- ◆7月5日◇成績表提出。◇派遣教員送別会。

レクリエーション活動

山口敏幸

今学期の派遣教官のレクリエーション活動は山野委員長を中心に実施されました。山野先生は1992年8月から93年7月まで(その時も委員としてご活躍)に続き二度目のご赴任でしたので(ご専門が地理学ということもあり)、例年になく大変充実したものになりました。派遣教官一同大変な幸運に恵まれたといえます。活動が多すぎてその中身までご報告する余裕はとてありませんので、イベント日程のみを列記します。

- 3月26日 浅野先生歡送会 (普陽飯荘)
- 4月3日 竹内先生歡送会 (友誼宮聚祥園)
- 4月4日 京劇鑑賞 (正乙祠)
- 4月13日 北京古跡・胡同めぐり
- 4月17日 クラシック音楽鑑賞会 (人民大会堂)
- 4月20日-21日 承德旅行
- 4月22日 蔵先生帰国祝い・草薙先生還暦祝い (北京外国語大学留学生食堂)
- 5月2日 北京ダックを食べる会 (全聚德王府鎮店)
- 5月8日 河合先生・河野先生歡送迎会 (薩杜伯爾)
- 6月4日 京劇鑑賞 (湖広会館)
- 6月6日 高見先生・山野先生歡送会 (沙鍋居)

6月7日-9日 北戴河旅行
6月16日 上海料理を食べる会（昆侖飯店上海餐厅）
6月26日 宮村先生、篠崎先生ご夫妻歡送会（大三元酒家）
7月2日 宮廷料理を食べる会（テニス同好会打ち上げを兼ねて）（中山公園・来今雨軒）
7月6日-13日 敦煌・ウルムチ・トルファン旅行

来学期のレクリエーション委員長はまだ未定ですが、有力候補として大阪外大の古川先生のお名前があがっています。ご活躍を期待しています。

*** 日中間のある悲劇的人物--陶晶孫 ***

巖安生

「日本文学の理論と方法の中国における実験」とも断じられる創造社の文学活動は、一方では「近代リアリズムに対する重大な誤解」（中村光夫）をおびたまま日本自然主義の文学理念を、また一方では当時の中国社会では受け入れられるはずのない大正の芸術家意識や文学青年的気負いを高々と掲げて国内文壇に切り込んでいった。そのことによって、創造社の文学運動は、その後の中国近代文学、そして近代の中日文化交流史（端的に言えば、その疑似と断絶・ズレの構造）にきわめて豊富にして深刻な教訓と問題を残した。この問題は現在も残ったままである。

そういう中でただひとり、あらゆる意味において特異な存在だったのが陶晶孫である。明治39年9才の時に来日、府立一中、一高、九大、東北大に学び、医学、生物学、生物物理学と専攻を積み、30才に東大医学部の助手の職についた、いわば超エリートとしての”而立”を日本で迎えたわけである。それに加え、家ではマザコン的な雰囲気にも浴し、学校では”天使”のようなToshiko先生に愛され、ピアノもたしなみ、学校の隣の日比谷公園に入り浸ったというように、彼は少年期から豊かな生い立ちの内に育ち、九大と東北大では交響楽団を作って指揮者になり、ピアノやチェロの独奏や伴奏などして、中央音楽会の貴族的世界にも遊んだ。また帰国後も、医学研究の傍ら、草創期の左翼演劇活動に参加して脚本の翻訳や自作を書くと共に、作詩作曲から舞台美術も担当するというふうに、文学、音楽、美術、建築の世界を自由自在に遊泳するに至った。このように科学者、文学者、音楽家、芸術家の素質を渾然一体として具え、かつ人格のレベルに達した純近代的自由精神の例は、ほかに知らない。

屈託のない習作の段階から、領袖の郭をはじめ社中をして「あの人にだけはかなわない」と嘆かしたほどながら、その後の文学史にはその名を見出すことはできず、ようやく昨年（1995年）になって、『陶晶孫選集』（人民文学出版社）が刊行されるに至った。つまり半世紀以上埋もれたままになっていたのである。だから、そのすっかり忘却されていた『日本への遺書』が戦後民主主義を思索中の日本の文壇に絶大な共感を呼び、今日に至るも「日中関係を考える上での”現代的古典”」（新版解題）として珍重されていることを、同胞の誰が知りえよう。1950年に台湾を脱出して来日以来、52年初めの病没まで書き記されたその文章は、「ユーモアとユーウツが同時になくなったのが日本だということほど、この国の文明を一言で批評しつくした言葉はない」（白井吉見）と評されるほどに、日本近代の病根をつく文明批評精神に満ちている。河上徹太郎、草野心平らはそこに「両国にまたがっての哀し

い激しいパトス」を感じ取り、佐藤春夫は「新しい日本と新しい中国とを結ぶ紐」を見てとった。このような序や表が30篇以上もあるという。その主だったものをこの度新版監修者の伊藤氏に見せて頂いたのは、近年稀な収穫であった。今まで、近代中日間の一方的な文化”交流”、というより平行線を辿りながらたえず摩擦・背反の相の中で、この『遺書』の示すような接点”紐”がみつからないままにいい加減退屈と窮屈を感じていた私には、救いでもあった。しかし同時に、陶という”紐”は、結局はやはり一条の幻影だったのではないか、という疑念も強い。というのも、彼の”新しい日本”に通じたあいさつは、”あいまいな日本”には通じなくなるのはもちろんであるが、それよりも、ほかならぬ彼が日本人に好感と期待を持たれたところの、日本に育ち日本を愛し日本に死したという経歴と、そこで培われた”西欧的ヒューマニズム”とも擬せられる感受性・精神的自由との両者が、そのまま彼の一生前は抗日、死後は革命化亢進中の一母国に通じる道を封じたのではないかと思われるてならないからである。それはまさに「両国にまたがっての哀しい」かつ厳しい呪縛になっていたのである。私は今後、そうした構造の解明を試みていきたいと思うのである。（『日文研』no.14より抄録）

中国滞在記「煙りが目にしみる」

草薙 裕（筑波大学教授）

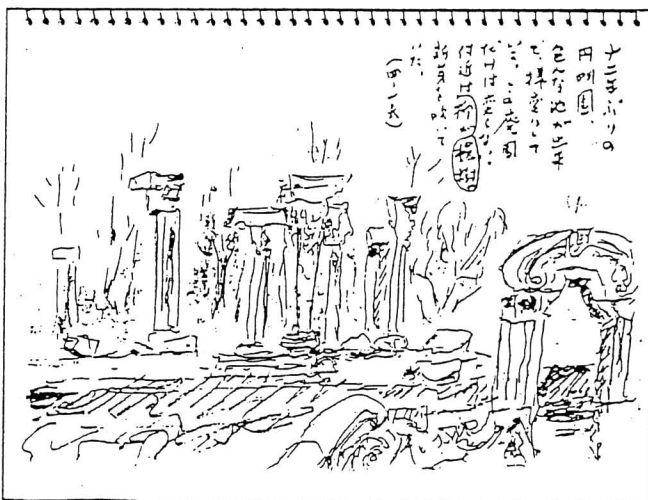
北京に来て2、3日してからデパートに行った。最初に目に入ったのがパイプであった。「パイプが吸える」と内心ほくそ笑み、数あるパイプを吟味し始めた。

筆者はかなりのヘビースモーカーである。普通の人が吸う、いわゆる紙たばこではなく、パイプたばこの愛用者で、この筋、数十年になる。新しく赴任した大学で、学生に名前を覚えられる前に「パイプの先生」というレッテルを常に付けられてきた。

ただ、今度、北京を訪れるに際して、愛用のパイプとたばこを鞆の中に入れなかった。おそらく、中国でもパイプが吸えるだろう、という軽い気持ちと、もしパイプたばこが手に入らなかったら禁煙をしてもいいか、と軽く考えた。手に入らないとしても、その対策として

4ヶ月分のたばこを中国に持ち込むわけにはいかなかった。

そういうことだったから、パイプを見つけたときは、まず一安心という気持ちだった。品定めがおわり、ではこのパイプを買おうかとした時、待てよ、もう一つ確認することがある、と気がついた。本来ならパイプを売っていれどどこかでパイプたばこを売っているのが当然だ。しかし、そこは言語を通しての異文化理解を専門の一つにしている筆者にとって、外国に行けば自分の論理で物事を判断しないのが信



条である。

そこで、念には念を入れて、パイプたばこはどこで売っているかと尋ねた。勿論、たばこ売場を教えられた。そのたばこ売場でパイプたばこを理解させるのに四苦八苦。筆者が中国語が出来ないと、売り子が英語も、当然、日本語も分からないからなのだが、どうも、パイプたばこの存在自体を知らないような気配なのである。結局、そのデパートにはない。どこにあるか分からない、というのが知り得たすべてだった。それから数日パイプたばこ探しの行脚が始まった。

まず、たばこを売っているあちこちの店で聞く。すべて「没有（ない）」であった。道を歩きながらパイプを吸っている白人を捕まえ、そのたばこはどこで手に入れたのかと尋ねた。返事は「In Europe」、一瞬、北京の地名かと戸惑ったが、それがヨーロッパだと気づいて失笑。しかし、彼はかつて、ここここにパイプたばこがあったと親切に教えてくれた。その店に行き、パイプの絵を描いたりジェスチャーをしたりで、ようやく相手が理解したようで「明天（明日）来い」という。なるほど、問屋で探してくれるのだろうと、翌日に託した。しかし、翌日も気の毒そうに「没有」が返ってきた。

それ以来、いまだに見つからない。厳主任がこの話を聞いて、絶対にある、自分が探させようといってくれた。2週間ほどして、3箱届けてくれたが残念ながらキセル用のきざみたばこでこれはパイプには使えない。

このような事情で、長年のパイプ党にとって紙巻きたばこに浮気する気にもなれず、幸か不幸か北京に来て以来3ヶ月以上禁煙をしている。

その間、北京では5月15日に公共の場所での喫煙を禁じる条例が発効した。このようなことがあるとたばこ飲みとして（禁煙中でもたばこ飲みを自負するのがたばこ飲みのサガか）悲しい。たばこを飲む機会が制限されたからではない。たばこを飲む人間が自覚してたばこを飲み、周りの人に迷惑を掛けないでいたら、これほどたばこを飲むことについてあれこれ言われなかったのではないかと思ったからだ。

その点、北京の条例がレストランを公共の場から除外しているのには納得がいかない。誰にも煙で他人の食事をまずくする権利はないはずだ。筆者は、飛行機の上でパイプたばこが堂々と吸えた20数年前でさえ、病院とレストランでは一度もたばこを吸ったことがなく、それがたばこ飲みの最小のエチケットだと考えている。

ところで、日本では世界禁煙デーへの理解を求める厚生大臣の発言を無視して、閣僚懇談会でたばこを吸い続けた橋本首相が嫌煙の市民団体から「ワーストスモーカー」という「称号」を受けたそうだ。首相からしてこういうことだから、こと喫煙に関しては日本人の世界での評判は悪く、本当の愛煙家の肩身を狭くしている。

閑話休題。パイプたばこが手に入らない北京でパイプを売っているのはなぜだろう。これは外国人が異文化体験をして、自分の判断基準で相手の文化がけしからん、おかしいなどという（例えば、アメリカ人が中国の交通を見て、車は"right side"（正しい側）のを、日本では"wrong side"（間違った側）を走っている、というようなもの）とは違う。

論理的にはどう考えても正解は考えられない。100歩譲って、パイプは何らかの意味でのステイタス・シンボル（中国にはこういう概念がすでに広がっているのだろうか）として

飾りの意味しかないのか。あるいは、パイプたばこのある地域（欧米、日本はじめアジアの諸国など、さらに中国でも上海などにはあるのかもしれない）へのおみやげとして売っているのだろうか。

それなら、パイプの一本でも日本に買って帰ろうか、ということになるが、せっかく、この中国的論理の矛盾で3ヶ月、いや帰国の時点では4ヶ月以上、禁煙に成功させてもらったのだから、中国で迎えた還暦を機会に、第2の0歳からは永久に煙から遠ざかろうか、大げさに言えばハムレットの心境である。

追記

帰国間近になった6月30日ついにパイプ・タバコが見つかった。売っている店を見つけたのではなく、例の「明天」の店にヨーロッパ産のタバコが数種入っていたのだ。恐らく、私がさがしたことがきっかけになって輸入したのではないだろうか。いずれにしても、中国（北京）にはパイプ・タバコはない、というのは訂正しなければならない。

中国滞在記「西安で思ったこと」

池内 輝雄

六月の初旬のある日、講演のために西安に出かけた。

西安は濃い霧のなかに沈んでいた。飛行機が着陸する間際になって、やっと黄金色した麦畑や緑の草はらがぼんやり浮かび上がってくる。空港に降り立つと、雨。長袖が必要なほど寒い。今年の気象は異常なのだと出迎えた関係者が言う。

西安はいまでは北京から飛行機で一飛びだが、わたしがはじめて中国を訪れた十二年前は、必ずしも近いところではなかった。飛行機はアブナイと言われ、泊まる場所も確保できないかもしれないと言われた。少年のころから、中国といえばこの古い歴史を秘めた古都のことを思い浮かべてきたが、そのときはついに訪れることができなかつた。

いま、郊外に新設された国際級の空港、高速道路、近代的な建物など、西安はいちじるしく様変わりしようとしている。それだけ、時代の歯車が一回転したのであろう。なにも西安に限ったことではない。わたしの住む東京、日本というところ、ひいては国際的な状況、そしてなによりもわたし自身の意識が、十二年前を一昔とする。この十年ほどの間は、わたしたちの世界史・精神史のうえで大きな変動の時期であったのであろう。

講演は、「日本現代文学の中の家族像」と題し、〈脱家族現象〉・〈棲分け現象〉を現代短歌や吉本ばななの小説、さらには〈現代〉の分岐点である1965年前後に問題を先鋭化してみせた庄野潤三や



小島信夫の小説などを通して話した。聴衆は西安外国語学院の先生や学生であった。終わった後、先生たちと懇談したが、彼らからじつはその問題はそのまま中国に当てはまると異口同音に言われた。わたしの狙いもそこにあった。家族観は同時にわたしたちの社会・世界観につながるはずで、日本だけの特殊なものではない。いや、特殊な問題であるとともに普遍的な問題でもあるのだろう。

それはさておき、講演の翌日、陝西省歴史博物館所蔵の唐代古墳の壁画「唐李重潤墓壁画」を地下特別室で参観することができた。そのいきいきとした自在な筆法と、なによりも残された色の鮮やかさを目の前にして、息を飲んだ。まさにそれが描かれないにしろの時のなかに、しばし佇む思いがした。

西安から帰ると、北京は、数日前と変わらず、すごい暑さであった。

中国滞在記「『好了、謝々』小荷物送付体験記」

竹村 信治

北京の四ヶ月が過ぎようとしている。結局、中国語を学ばないままで終わってしまった。餐厅で、旅游の先々で、巧みに、果敢に中国人に話し掛けておられる專家をみてはうらやましく思い、心うごかないではなかったが、舌のもつれがちな男が真っ赤な顔で額に汗し口角に沫をためて訳のわからぬことを喋っている、そんな夢を一度みて、あきらめることになった。それが四月のはじめころ。以来、指と鉛筆がたよりの毎日、ストレスは授業で解消し、学生にはとんだ迷惑をかけてしまった。

指と筆談がたよりの毎日といったが、それにもとうぜん限界がある。商場では棚の品に指が届かず、賓館の服務員との漢字のやりとりは、語義の相違からかえって誤解を招いているようでもある。ただ、よくしたもので、こうした不自由さと引き換えにとでもいおうか、思いが通じた時の喜びはまた一入で、この一週間ほどまえにもちょっと感動的な体験をした。

帰国を数週間後にひかえ、このところ專家の間では荷物送付のあれこれがよく話題になるが、私も先日、なんとか小荷物を二箱送り出した。感動的な体験というのはその折のことである。前日の夜、荷物を小分けして袋に詰め、郵便局でこちらの意志を伝える一文を辞書をたよりにものし、翌朝、そのメモ用紙と鉛筆、マジック、辞書、荷物、それに前夜以来のストレスも携えて、重い足を運んだ。徒歩三分、近付いてくる郵便局を前に一息入れて、決然足を踏み入れると、折しも何人かが荷物の箱詰めをしている。荷物をおろし、メモ用紙を小姐に見せようと手をポケットに突っ込んでいると、彼女の方から囁りかけてくれた。うんうんと頷いていると手早く箱を用意して渡してくれる。なるほど格好を見ればなににも言わなくても（見せなくても）用件はわかるというもの、案ずるより生むが易しとはよくいったものだとな得して、先着の人たちを盗み見ながら宛名などを箱に書き、荷物を詰めた。詰めている最中にも彼女は横に立って囁りつづける。うんうんとまた頷いていると、ちょっと焦れた様子で荷物を点検しはじめた。それと知ってまたメモを取り出し衣類だと伝えようとする。見る前にわかった様子で、彼女は足早に奥に入って何やら一言添えて伝票をこちらに放り投げた。私は手にしたメモをカウンターに置き、荷物の重さを量って伝票に記入する。記入している私の前で手持ち無沙汰の趣の彼女は、なにげなく私が置いたメモ用紙を見てい

る。そして事件はここからはじまった。私は記入しおわり伝票を渡す。彼女は何も喋らない。記入内容を点検し、不足を指で示して加筆を促す。無言のまま荷物の封をし、秤に載せて重さを確認する。さらに紐掛け機を指差して運ぶよう指示し、掛けおえると机に戻って伝票を処理する。その間まったく轉りがない。顔にも表情がない。私のメモを見て中国語ができないと分かったのだろう。それと察してちょっと淋しくなったが、仕方のないこととあきらめ、彼女の書いてくれた数字通りに



支払いをすませた。領収書などを私に手渡すと、彼女はカウンターにならぶ客を置き去りにし、無言のまま荷物のところに行って麻袋に入れようとしている。あわてて私もそこに行って手伝う。大きい箱が入りにくくて難渋したが、二人で口をもって何とか滑り込ませた。次には何があるのかと、心配そうな私。その目に思いがけず彼女の笑顔が飛び込む。「好了!」、…、「謝々」、彼女は初めて笑顔を見せた。こわばった私の顔もほぐれていく。「再見」「再見!」…

人はいろんな場面で幸せな気分になれるものだが、人の思いやりに触れ、それにはたと気付いたときに胸に広がる思いには、なお格別のものがあるだろう。私のメモをみて彼女がなにを思ったか、それはわからない。けれども笑顔とともに私の胸に届けられた「好了」の声は、ねぎらいの響きをもって聞こえ、無言のままてきぱきと事を処理していた様子がそれに重なり、私はその間の彼女の心遣いを思った。「好了」の言葉は胸にしみた。そして、その言葉の向こうにあってしかもその言葉によってはたと気付かされた、耳には聞こえず目にも見えない彼女の情けが、いっそう深く心にしみた。

この四ヵ月、これに似た経験はいくつもあった。言葉の不自由なぶん、人の情けに敏感になっていたせいもあるのだろう。陰に陽にお心遣いをいただいた研究中心の中日教職員、派遣専門家、学生諸君のご厚情には、お礼の言葉もみつからない。日本での古典文学研究の成果を中国でそれを学ぶ同志に送り届ける役目を負ってきた私は、逆に、文字通りかけがえのない贈り物をみなさまからいただいて、まもなく日本に帰る。謝々!

研究ノート--「湖北省農村の家族と宗族」調査旅行

稲村 哲也

文化人類学において中国研究というと「家」や「宗族」が最大のテーマであったし、現在もそれは続いているといえよう。「宗族」は特定の祖先に父系のラインでつながる一種の親族集団で、族外婚（同じ集団内での結婚が禁じられる）などの規定をもっている。中国の東

南部で特に発達してきたが、その理由としては、その地方には19世紀初頭まで開拓と移入が続けられ、開拓地での生活防衛のために密集居住型の集落が同一宗族によって形成された、という歴史的説明がなされている（M・フリードマン1995『中国の宗族と社会』弘文堂：213）。宗族が発達すると族譜が編纂されたが、解放前の事例として、広東・広西両省に広がり85世代遡る嶺南呉氏の巨大な族譜もある（その起源は紀元前1千年紀にまで遡るとされる）。そのような巨大なもの「威信に対する渴望」から「再編成」されたものであることは明らか（前掲書：34-38）だが、普通のものでも10数世代から数10世代を遡り数千の人々を組織する「宗族」が、中国の地域社会の基盤であったことは確かである。しかし、解放後、外国人による調査のほとんどは香港や台湾を対象としたものであり、中国本土においてどのように変化し現状はどうであるか、というのが今も大きな関心事となっている。

わたしは中国研究の専門家でも親族研究の専門家でもないが、当センターに赴任した機会に少しでも実地に見聞したいと思っていたが、客員研究員の黄栄光さんの協力により、彼女の古里の湖北省を妻子とともに訪ね、小調査を実施することができた。

6月15日0時31分に北京西駅を列車で出発し、20時30分に襄陽に到着した。到着後すぐにホテルで休むつもりで、車内ですでに夕食を済ませていたが、駅にワゴン車で出迎えてくれた黄栄光さんの一族の黄徳恕氏が夕食に招待してくれた（以後も毎食、一族のどなたかのご招待を受けることになる）。その席では蛇のぶつ切り料理を初体験することができた。

翌16日と17日は黄栄光さんのお父さんの生家がある荊陽縣陽郷黄州村を訪ねた。ちょうど小麦の収穫が済んだところで、麦を道（舗装道路）に広げて自動車ですて穀する習慣が定着していた（ネパールでも同じやり方をよく目にした）。また、ちょうど水田の耕作と田植えが行われており、牛や水牛が耕起するのどかな光景が見られた。黄州村には黄栄光さんのお爺さんたち（お父さんのオジさんたち）が現在も居住しており、そのお宅を訪問して、黄一族の歴史と現在について聞き取りをすることができた。極めて短かい調査ではあったが、中国の伝統的な家族や親族の形態とその変容過程、現状の一端を知ることができ、貴重な経験でもあった。以下、調査のまとめの一部をご紹介します。

●黄州村と黄一族

黄州村の住民構成は昔から黄姓が圧倒的に優勢で、現在約180-190戸（約1,100人）のうち他姓は8戸のみ（徐、李、何、呉、孫）である。現在は住民一人当たり0.7畝（「ムー」：1畝は約6.7アール）の農地（水田）の配分を受け、農業税を150元支払っている。黄一族はほかに竹院子（黄州の北方約2km）と黄岡（黄州の北東約10km）にも居住している（両村とも黄姓が優勢だが他姓もかなり居住している）。どちらも丘陵地で畑作が中心である。耕地は広い（一人当たり10畝以上の畑が配分される）が生産性は低い。そのため租税を支払うためには労働がきついので、都市への移住者が多く、黄州村への移住者もある（新居は移動するが多い）。移住の理由として「他姓が優勢になってきているため」をあげる人もいる。

●黄氏宗族とその由来

始祖は黄世龍（黄州村の先祖）、黄世虎（竹院子）、黄世豹（黄岡）の三兄弟で、清朝初めないし明末に陝西省の大槐樹から移住してきたと伝えられている。輩份文字系列は以下の

通りである（輩份は二文字の個人名の最初の文字で一族のなかの世代を示す。四行詩で構成される）。ただし、[]内は同治年間建立の石碑（現存する）に刻まれているものであるが、それ以前は記憶に頼っているためやや不明確である（ぬけている可能性がある）。{ }内（正から章まで）が現成員である（現在の最高世代から始祖までは少なくとも13世代遡ることになる）。

聞、世、天、国、佳、秀、金、尚、大、必、邦、新、興、{正、[徳、運、光、昌、華、榮、保、章}、公、卿、相、吉、万、年、之、長]

族譜は、1945,1946年頃、戦火を避けるため位牌と共に「張湾」という場所の山中に運んで隠したが、以後紛失したそうである。

●宗族の機能

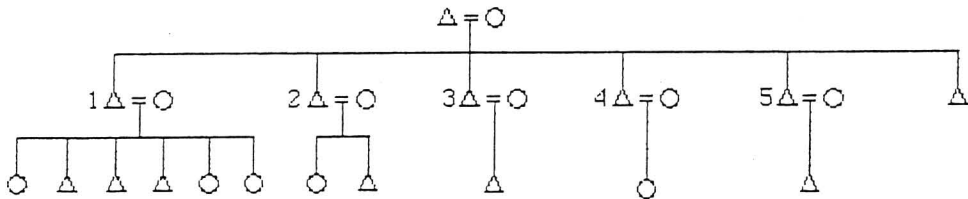
解放前は「公田」（共有の田）が約100畝あり、それを2戸（親子）が小作していた。4万斤の穀物（米、麦など）の収穫があった。収益は廟の番人（王姓で元鍋職人）の生活、祭祀の費用（食事）、一族の訴訟費用、宗族成員の困窮時の救済（火事、親の死亡など）などに使われた。収益は竹院子の族長（当時は黄徳福）が管理し、黄州の族長（黄光圭=郷土）に渡した。

一族の廟が竹院子にあった（丘陵地にあり、洪水が避けられる）が、1954年の洪水で壊れ、以後はなくなった。かつては、大晦日、清明節（4月5日）に廟で祭祀を行い、参加者で大鍋で食事をつくり、肉、酒を振る舞った。また、結婚に際しては、廟を訪問して祖先に報告し、紙銭を燃やし、爆竹をならして、礼拝した。

●黄光楷（黄栄光の曾祖父）の家族

1945年当時の黄光楷（1946年に死亡）の家族構成員は22名で、黄光楷とその妻（張氏）、および長男～五男の各夫婦家族および六男（独身）からなっていた（文化人類学では、このように同一世代に複数の夫婦が同居する家族形態を「拡大家族」という。日本のような一世代一夫婦の三世代家族などを「直系家族」という）。

1945年当時の黄光楷・家族の構成



●当時の家族の経営（農業、豚飼育、手工業）

農地は水田など40畝余り所有し、米、小米（粟）、高粱（コウリヤン）、緑豆、豆（大豆）を栽培し、村外にも約100畝の土地を所有し小作させていた（5,000-7,000斤の小作料を徴収）。また、70-80頭の豚を飼育し年に20頭程度売却していた。他に、家族が所有する工場は次の三つがあり「黄家三坊」と呼ばれていた。

粉房：豆、サツマイモからはるさめを生産

油房：胡麻、棉から油を生産

糖房：米、粟に大麦の麦芽まぜて発酵させ砂糖を生産

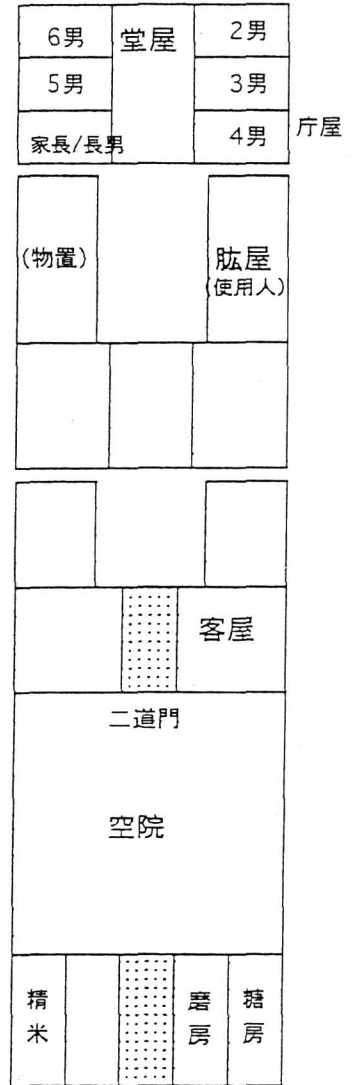
農産物を市場で貨幣に換えるのは長男・黄昌龍が担当、当時は市場が黄龍という場所で偶数日に開かれた。はるさめ生産は四季を通じておこなわれ、次男の昌健が担当した。油と砂糖の生産は冬季に従事。油房は村の外にあり、黄昌龍が担当したが作業は専門職人を雇用した。砂糖生産は全員が分担した。生産は注文で加工し、原料を持参の場合は加工賃として滓をとった（豚、牛の飼料として利用、油滓は肥料としても利用）。農業は4男の昌世と5男の昌久が主に担当、家族と雇い人を指揮した。農繁期は農作業の賃労働者を雇った。3男の昌佑は兵隊に行き行方不明となった。家長の黄光楷が直接に事業担当の息子に命令を下し、収入はすべて管理した。女性と子供は家長の妻が監督、面倒をみた。豚の飼育と糸紡ぎは女性の仕事だった。

食事は、三日間交代で嫁が担当した。大きい鍋で作っておいて、男性組、女性組、子供に分けて、みんなが一緒に食べる。衣類に関しては、綿畑が7畝あり、収穫した綿を夫婦家族当たり3-5斤分配した。女性たちはそれを紡ぎ、反物と換え、家族の衣服を作った。

●”分家”

1946年黄光楷死亡の3ヶ月後に兄弟が相談して分家した。家屋・土地・家畜・工場の生産機械などを、株に分けて、人数分に分けた。4男が老母と3男の寡婦・子供と引き取った（他の兄弟より家を二間多くもらった）。6人兄弟のうち6男は学生であるため権利を放棄した。現在の家族は13家族に分かれている。うち拡大家族が1、直系家族が6、核家族が6である。また、3家族が村外の都市部に出ているが、その他は村内にそれぞれ居住している。現在の黄州村には元の家屋のうち堂屋、斤屋、肱屋が残っており、そこに長男の一家（長男夫婦とその次男夫婦とその長男夫婦とその子の4世代直系家族）が住んでいる。また、現在も元の拡大家族の成員間での農作業の協同などは行われている。

黄光楷家の配置模式図



センターを考える---外国研究としての日本学

代田 智明

日本学研究センターに赴任して3カ月余りたった。教育の現場、様々な会議、事務作業、研究発表会などを通じて、自然、センターの抱える問題について、いくらかだが、考えさせられる事も出てくる。こちらへ来てみて、仕事の量はさほどではないが、状況はなかなか大

変なのだと悟った。

その大変さとは、例えば、教える側のもどかしさと、教わる側の辛さというようなことであろうか。つまり、熱心に教えているのになかなか学生のレベルが上がらない、という先生の愚痴と、必死に勉強しても授業に追いつけない、という学生の悲鳴とである。この問題をときほぐしていくと、やはり外国研究の難しさ、ということに思い至らずにはいけないのである。

まずは、教わる側を弁解する形で、外国研究としての日本学を考えてみよう。一般的に言って、知識の蓄積とか、資料の量、視野の広さという面で、日本人の研究者に及ばないのは、やむを得ないことである。だから、センターの修士論文が、日本の大学学部卒論と同じレベルだと言われても、そう嘆かわしいことなのではないと私は思う。そこから少しでも、レベルアップを図り、一つでも多く優秀な業績が生まれれば、喜ばしいことだと言えよう。

とりわけ、中国における日本学は、その歴史的成り立ちからして、多くの困難を抱える事情がある。日本は、そもそもが翻訳中心文化だから、かつてはヨーロッパ文学の研究者は、一流の文化人でもあり、オピニオンリーダーでもあった。しかし中国では、五四新文化運動の時期に西洋文化の吸収が強調されたことはあっても、その後の人民共和国の歴史的経過を経て、外国研究が、文化界に独立した位置を持つ伝統は、強く根付くことはなかった。欧米に対してすらそうなのだから、まして日本研究においておや、である。

知日家の友人が、苦笑混じりに、「日本に思想があったんですか」と言う中国の知識人が多いと嘆くのだが、それも無理からぬところなのである。一体に、中国人にとっての日本のイメージとは、明治以前は中国文化、明治以後は欧米文化、というステレオタイプ化されたものが圧倒的だと言えよう。だからそうした環境のなかで、日本研究を志すこと自体からして、なかなか得難いことではあるのである。

よく知られているように、魯迅や郭沫若の世代が、日本に留学したのも、日本を通して、西洋の技術を学ぶためであった。そうした近代におけるいきさつが、現代の日本観にも反映しているのかもしれない。けれどもそう考えた上で、一面でそれはそれで、方法なり立場になるのではないかと逆に考えてみることもできるのではないだろうか。なぜなら、実際日本の学術の基盤はどの分野でも、欧米の理論や方法を吸収したり、こなしたりして来たことは事実なのだから。

そこで今度は、教える側に回って、中国におけるに本学の可能性を考えてみたい。学生諸君に励んでもらいたい所以である。

外国研究である以上、自国の文化的視点は、意識しようとしまいと、免れないものであろう。同じ外国研究者としてアドバイスをおくるとすると、むしろそれを意識化した方が、実り豊かだと思う。中国人という視点から問題意識を編み出すことは、他の面でかなわなくても、日本人では気が付かない側面を掘り出す可能性があると言えるのである。そうした立場に立って、さらに欧米の理論方法を利用し、日本という対象を読み解く。それは中国の学術において、独特の立場を創り出せる可能性があるかもしれない。やや大袈裟に言えば、中国・日本・ヨーロッパという、様々な文化の衝突と融合の興味深い場面を体験できるかもしれないのだ。

無論、学問の道は空想や仮説で出来上がるものではない、と言うことは、耳にタコができるくらい聞かされていることだろう。実際、今の出発点は、見たところ余り見栄えが好いとは言えない。道は遠く、平坦ではないようだが、しかし、志ははじめから小さくする必要はないはずである。

正直言って、中国の日本学の層は薄いと言わざるをえない。中国の日本学だけでなく、日本文化にとっても、中国の学会に影響の及ぼせる日本学研究者が、一人でも多く必要なのだ。そのためにも、高度の専門性に耐えられる力のある研究者を目指して欲しい。

将来的に言えば、そうした専門性を培う場として、センター自身が、修士課程の上に博士課程を設けることが必須になると思う。そうなれば、暖簾に腕押しだという教える側の愚痴も少なくなるだろうし、教えられる側の悲鳴も——なくならないだろうが、生産的なものになることであろう。

** 編集後記 **

今号は最後を格調高く(?) 締めくくりたいと思いつつも、成績表をつけたり、机の整理をしたり、帰国の(心の)準備をしたりしながらの編集作業がおわりました。ニュースに続いて、山口先生(レクレーション委員)に今学期の派遣教官の充実した活動記録をまとめていただきました。ついで巻頭で、厳主任に「陶晶 孫」を通して日中文化交流史概括を論じていただきました。最後に代田主任教授補佐に、センターの教育・研究について語っていただきましたが、そこでも簡潔に日中交流史が述べられ、それをふまえた「在中国日本学論」が論じられています。そして、おいしいサンドイッチの味付けとして、草薙先生、池内先生、竹村先生の軽妙な随筆「中国滞在記」を掲載させていただきました。それにつなぎとして、拙稿も「研究ノート」という形で挿入させていただきました。カットには池内先生の素敵なお手紙を使わせていただきました。

編集担当者(稲村)は今号が最後となります。秋学期の49号から担当しましたが、先学期末にちょうど50号となり記念特別号を出したときから、やや趣味に走り、独断的な紙面作りを始めました。ご迷惑をおかけした点おわび申し上げます。ただ、学生の寄稿を加えたことで、私自身も学ぶことが多かったように思います。

今号でも畔上事務主任の自己紹介は見送りました。それは、謎はなぞのまま残した方がよいと思ったからです。ところが、7月2日のテニス同好会打ち上げを兼ねた食事会で、宮廷料理と生ビールが格別においしかったせいでしょうか、謎のかなりの部分が解明されてしまいました。彼女は長野県松本市の出身で、看護学校で3年勉強したのち、2年間病院で看護婦として働きました。在職中たまたま中国に旅行に来たのですが、そのとき飛行機の中でたまたま聞いた中国語のアナウンスの響きの美しさに感動し、退職して北京の語言学院に留学してしまいます。そして留学中、たまたま語言学院内にご両親と住んでいた中国人と知り合い、結婚してしまいます。3年前、語言学院を卒業後、たまたま北京日本学研究中心の事務補佐の仕事に就きました。

「『たまたま』が多い、ほとんど行き当たりばったりの人生ですね」と聞いたところ、「両親からもそう言われて、あきれられています」とのことでした。このような事例は、正岡先生のライフコース論ではどんな類型に当たるのでしょうか。『たまたま型』でしょうか。流れに逆らわない『たまたま型』人生「不錯!」。

冗談はさておき、畔上さんには派遣教官(およびその家族)一同本当にお世話になりました。問題をすばやく察知して的確に処理する能力は看護学校と病院で身につけたものでしょうか(大学教官というのは病院の患者と通じるところがあるのでしょうか。2年で病院を辞めても無駄にはならなかった?)。

ともかく今学期は全く「没有问题」でした。包容力あふれ気さくな中日両主任(厳先生・木山先生)と有能なる中日両主任補佐(徐先生・代田先生)のもとで、また国際交流基金の小熊所長、馬場さんのゆきとどいたご配慮と、王学長初め北京外国語大学関係者ご一同、中日の事務局の方々のご助力のおかげで、派遣教官一同、本当に気持ちよく楽しく仕事に専念でききました。離任組一同に代わり、衷心よりお礼申し上げます。

経験豊富な各分野の先生方との交流も優秀な学生諸君との交流も貴重な収穫でした。「センター通信」がそうした交流の一助になったとすれば、編集担当としては望外の喜びです。

中国残留組の木山先生、代田先生、山口先生、畔上さん、引き続き「加油、加油、再加油(?)」。